

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (特設分野研究)

研究期間：2017～2019

課題番号：17KT0136

研究課題名(和文) 対話による意思決定と政治社会的体制：古代ギリシア民主制と古代エジプト王制の比較

研究課題名(英文) Decision making in oral performances in Ancient Greek and Egypt

研究代表者

高橋 秀樹 (Takahashi, Hideki)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：80236306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：古代ギリシアと古代エジプトのオラリティ文化の比較研究を行った。分析対象として取り上げたのは古代エジプトの「対話文学」と古代ギリシアの叙事詩である。それぞれの文芸の登場人物の発言を分析する際に、議論の中でどのような発言が有効に機能するかという点に注目した。また、激しい議論が戦わされる話題として社会の没落が取り上げられる場合、二つの文明の間でどのような違いが見られるか分析した。これらの分析を通して、専制君主制の基盤となる言論文化と民主制の基盤となったオラリティ文化の違いについて、その一部を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主主義的な政治社会的意思決定の仕組みのなかで、言論文化、オラリティが果たす役割は根本的なものだが、言論文化それ自体は民主主義的な政治環境の中でも、独裁的な政治環境の中でも高度に発達する。オラリティ文化の在り方を両極端な政治社会的体制の分岐的基層として位置付けて分析することによって、民主主義的な社会の中で、どのような言論文化、オラリティの在り方が望ましいものであるのか解明していくことができる。多様なテクノロジーによって政治社会的意思決定における共在性が担保されつつある現代社会において、オラリティ文化が政治社会的意思決定に果たす役割と影響について学術的な展望を与えることができる。

研究成果の概要(英文)：I conducted a comparative study of the orality cultures of ancient Greece and Egypt. The subjects of analysis are the "dialogue literature" of ancient Egypt and the epic of ancient Greece. When analyzing the utterances of each literary character, I focused on what kind of utterances worked effectively during the discussion. I also analyzed the differences between two civilizations when the downfall of society was talked about as a topic of intense discussion. Through these analyses, I clarified some aspects of the differences between orality cultures that formed the basis of a tyranny and a democracy.

研究分野：西洋史

キーワード：オラリティ 西洋史 西洋古典学 ギリシア エジプト 対話 叙事詩 教訓文学

1. 研究開始当初の背景

オラリティ、すなわち対面関係や座談の中での即興的で一過性の話し言葉の世界や声の文化は、集団的な意思決定のために自覚的に運用され、そのためのルールや技法を高度に発達させ、遂には物理的に共在することが不可能な膨大な人数の政治社会的意思決定体制にまで発展することがある。すなわち、民主主義的な諸制度である。直接的な共在が実現不可能な状況に至ってもなお、各種の先端技術を駆使して対話と共在性が(少なくともその建前が)維持し続けられることは、まさにオラリティが民主主義の本質的要素の一つであることを示している。

このことは、民主主義を生み出した古代ギリシアの政治社会文化の諸側面において既に顕著に認められる。都市国家の政治社会的意思決定が最終的な決着を迎えるのは、市民総会での議論、すなわち全市民共在の場での対話においてであった。ゆえに、古代ギリシアにおいては弁論術や対話の文化が高度に発達することになった。

しかし他方、専制君主的絶対権力を発達させた古代エジプトにおいても、対話や談話は政治社会的意思決定の場で重要な役割を果たす要素であった。神話的テクストにおいてすでに、物理的・肉体的闘争と集会の場での口頭の対決とが交互に進み、前者の対決の結果が後者の対決の結果によって逆転させられつつ出来事が進行していく事例がある。他の古代エジプト文芸でも、意思決定過程における対話・談話の決定的重要性は、随所で認められる。

ゆえに、古代ギリシアでも古代エジプトでも政治社会的意思決定においてオラリティ文化が決定的な役割を果たしたことは確かだが、その役割は民主主義的展開に対して促進的にも抑制的にもなりうるものであった。両事例の構造的な比較研究が、現代及び近い将来の社会におけるオラリティの役割について展望する上で、重要な研究テーマであると言えよう。

2. 研究の目的

上記のような研究テーマはこれまで十分に探究されてこなかった。「オラリティと社会」が独立した研究領域として認知されにくかったこと、そして古代ギリシア語資料と古代エジプト語資料とが別個に研究されがちだったことにより、殆ど研究が進められていない。このような状況において、申請者は既に古代ギリシア語資料と古代エジプト語資料の比較研究の方法論についての考察を公にしており、それ以後途切れなく各論についての研究成果を示してきた。本研究の目的は、これまでの蓄積を踏まえ、オラリティ文化に焦点を当て、パピルス史料調査を組み込んで研究を発展させること、そして、古代エジプト「対話文学」と古代ギリシア叙事詩・哲学的対話編と比較しながら、それぞれのオラリティ文化の特質がどのように対極的な政治社会的体制に影響を与えたかを問うことである。

3. 研究の方法

- ・古代エジプト「対話文学」に見られる、議論の文化、オラリティ文化の(特に対話の中での意思決定過程について)特質を分析する。
- ・古代ギリシアの叙事詩に見られる、議論の文化、オラリティ文化の(特に対話の中での意思決定過程について)特質を分析する。
- ・上記二つの分析結果を比較し、それぞれどのように対極的な政治社会体制(専制君主制と民主政)の基盤として機能しているか考察する。
- ・海外博物館等でのパピルス調査、遺物調査により、上記の知見を確認し、物的背景について分析する。

4. 研究成果

(1)文芸作品の分析

古代ギリシアと古代エジプトのオラリティ文化について、公共の場での議論において、発言者が自らの要求を他者に強いることを意図して発言する場合(これを「強制(強請)発言」という)、その強制しようとする内容に添えて、過去の何らかの出来事について語ろうとし、そのことによって当該発言の効力を高めようとする傾向は、どちらの文明にも認められる。しかし、その過去の出来事について、古代エジプトの場合、発言者が直接体験したことの無いものであってもよいが、古代ギリシアの場合は、発言者が直接体験した出来事であって、なおかつその発言を向けられる(つまり、何らかの内容を強制(強請)されようとしている)者もその同じ出来事を直接体験していることが原則的な傾向として認められる。そして、この原則的傾向が多様なヴァリエーションを有し、巧みに運用されていくことに、古代ギリシアの叙事詩のなかのオラリティ文化の特徴がある。

a) 『イーリアス』に見られる強制(強請)発言の原則的傾向について

研究期間中、特に古代ギリシアの英雄叙事詩『イーリアス』の三か所に焦点を当てて分析成果を公にした。

先ず、『イーリアス』第 XIII 書であるが、この部分は、戦闘描写が優勢で、登場人物の発言は頻度が低めでかつ短めである。この点で『イーリアス』の古層としての特徴を示しているようにも思われるが、他方、詩句の構成においては、幾何学的対称性が顕著であり、現存する『イーリアス』の全体像が成立した頃（つまり『イーリアス』の新層）の美的嗜好を強く反映した部位かもしれない。このような二面性を備えた部位の諸発言は、その多くが上記のような原則に則った内容になっているが、それと並んで高度に技巧的に造りこまれた事例も見られる。例えば、強制（強請）発言の中の、過去の出来事の言及という要素と、強制（強請）したい内容の提示という要素が、二つの発言に分割して示されるといふ事例がある。換言すれば、古くからの伝統的要素を巧みに活用し、（当時の人々にとっての）新奇性を生み出すことに成功し、二面性を備えた詩句群となったのが第 XIII 書であると言える。

次に、『イーリアス』第 XIV 書であるが、ここには第 XIII 書と同様に、強制（強請）内容と、強制（強請）発言が備えるべき要件（対話関係者が共に経験した過去の具体的出来事の提示）とが、二つの発言に分割されている事例がいくつか見られる。第 XIII 書の分割事例では二つの発言を行う者が同一人物であったが、第 XIV 書では、二つの発言を行う者が別々であり、その二つが合わさって一つの強制（強請）内容の実現を導いており、新しいバリエーションが示されている。また、強制（強請）発言が備えているべき要件を備えていないのに聞き容れられ、後にそれが原因となってネガティブな状況に陥るといふ事例も見られる。また、強制（強請）発言を向けられた側が、その強制（強請）発言に添えられた過去の具体的出来事を取り上げて、強制（強請）発言を行った者に対立する観点からその内容を批評し、強制（強請）をかわそうとする事例も見られる。これについては、今後新たな法則性を示すものなのか考える必要がある。新たな法則性の可能性としては、強制（強請）発言を行う者は、強制（強請）しようとする者に対し、それまでの対話の中で既に想起されている出来事の記憶ではなく、それまで話題にされなかった出来事の記憶を喚起することによって発言に新奇性を持たせ、強制（強請）しようとする者の関心を高める必要がある、といったことが仮定されよう。更に注意したいのが、発言の強制（強請）力が一旦無効になったあと、将来の報酬を約束することによって、改めて強制（強請）力が働くといふ事例である。しかし、この強制（強請）によって生じた結果は望ましいものではなかったから、将来の報酬の約束は、強制（強請）発言を有効にする要件としては、共に経験した過去の具体的出来事の提示より、価値が低いものとされていると考えられる。ここで、この二つの要件が複数の二項対立から成る複雑なものであることに注意しなければならない。つまり、過去の（つまり、既に確定した）ことが、将来の（つまり、まだ確定していない）ことより重視される、という文化が顕れているのか、それとも、共に同じ出来事を経験したといふ事実（つまり、共同体的意識）が、報酬（つまり、個人的営利）より重視される、という文化が顕れているのか、という二項対立であるが、これについては今後の研究で改めて原則的傾向を確認していく必要がある。

そして、『イーリアス』第 XIV 書であるが、ここでは、一つの例外を除き、全体として強制（強請）発言の原則的傾向が維持されていることが確認できる。その例外とは、あらゆる登場人物の中で圧倒的優位にあることが定まっている主神ゼウスの発言の事例であり、強制（強請）発言の原則的傾向に則らなくても、その意思が実現される事例となっている。立場が上の者から下の者に向けて行われる強制（強請）発言については、過去の出来事について言い添えるようなことをしなくても効果を発揮するといふ事例がこれまでも見られてはいるが、第 XV 書の他のすべての事例は強制（強請）発言の原則的傾向は維持されている。つまり、第 XV 書の注目すべきところは、様々な登場人物を描く中で強制（強請）発言の原則的傾向を維持しつつ、ひとつだけかかる原則に則らずともその意思を貫徹していくことができる存在を描き、その卓越性を巧みに表現している点にある。逆に言えば、それだけ巧みに強制（強請）発言の原則的傾向が運用されているということでもある。

以上のように、『イーリアス』で特に取り上げた三か所において、強制（強請）発言の原則的傾向の有効性が確認され、それと並んで、新たな分析視角を得たことが研究期間中の成果であった。

b) 古代ギリシアと古代エジプトの没落史観の異同について

古代ギリシアであれ、エジプトであれ、激しい議論の文化が文芸化される背景として、社会状況の激変が挙げられ、とりわけ没落史観が普及したときその傾向は強い。では、そのような没落史観について、二つの文明の異同はどのようであるだろうか。

古代ギリシアのヘーシオドスは、エーゲ文明が崩壊した後の「鉄の種族の代」の社会の荒廃を嘆いている。古代エジプトの『イプエルの訓戒』と『生活に疲れた者の魂との対話』は、古王国時代の統一政権が崩壊した後の社会の混乱を嘆いている。いずれも道徳的荒廃や有力者の抗争を鋭く繰り返しあげつらっているが、最悪の時代という認識を決定づけるのはもっと具体的な事柄で、裁判機能の歪みによる一般人の不利益や、統一政権不在によって生じた再分配機能破綻による民衆の不利益である。ここまではどちらも大きな類似性を認めることができる。しかし、ではどのように悪しき状態を克服できるかということになると、それぞれ微妙に異なってくる。

古代エジプト第一中間期の場合は、宗教的な力の発動を契機として、かつての状態への完全な回帰 統一政権の樹立 が希求された。しかし、ヘーシオドスの場合には、神々の力を敬うことによって、個々の社会構成員の行動が変わっていくことが希求された。いずれも宗教的な存在に

事態転換を発動させることを期待する点は同じだが、それは、未曾有の没落の事態に直面していて、通常的手法や存在では事態転換が期待できないという深刻さから自ずと生じる発想だろう。特徴はその先、政権再建、構成員各自の変革という二つの方向に分かれるところにある。それぞれの政治文化が如実に反映されているように思われ、興味深い。古代エジプトではファラオの王権の永遠なる秩序という政治文化が没落の時代にも維持された。古代ギリシアでは、権力者よりも社会構成員の自己改造という点で、後の民主制社会の成立の予兆となる没落社会論であったと言える。未曾有の社会的没落という一種の極限状態の中で生まれた文芸に、それぞれ歴史的な政治文化の反映が認められる。このことは、それぞれの状況で発達していく公の場での議論の文化、オラリティの文化に大きな影響を与えるはずだが、その具体的な構造については次の研究課題としたい。

(2)調査活動について

海外調査については、当初の計画通り Chester Beatty Library (ダブリン、アイルランド)、British Museum (ロンドン、連合王国)、ベルリンの博物館島にあるペルガモン博物館、旧博物館、新博物館で文献調査を行った。当初計画していた Bibliotheque Nationale in Paris (パリ、フランス)での調査については、ナント大学に調査先を変更して実施した。ナントでは、古代ギリシアと古代エジプトの政治文化の比較研究について講演を行った。

これらの調査により、古代ギリシア、エジプトにおけるオラリティ文化の貴重資料を実見することができ、文書史料研究を大いに補強することができたが、同時に新たな課題に取り組む必要性を痛切に感じるに至った。それは、古代ギリシアとエジプトが対極的な政治文化を育みながらも、密接に交流していたという事実を、政治文化の基盤にある議論文化やオラリティ文化に即してどのように考えていくかという問題である。

これについては二つの文明の中継地に注目しながら分析と考察を進めている必要があると思われる。二文明を青銅器時代以来中継してきたのがキプロス島であった。そもそも東方の鉄器文明もキプロスを通してギリシアに導かれたとも言われている。そこで、キプロス文化・遺物からの知見に照らして、これまでの研究を発展させていく必要がある。その際、文明に特徴的な思考方法や論理構成が、図像的嗜好や図像的表象と連動していることは、注目されるべき重要なポイントである。ディスカッションの際に用いられる話術の根底にある論理的整合性に関して各文明の特徴的嗜好を分析するにあたり、それぞれ特有の美意識を視覚的資料と連動して探っていくことが必要になる。次の研究にこの作業を組み込みながら、これまでの成果を発展させていく予定である。

また、文明間での文化の伝達について、技術的、物理的環境も考慮しておく必要がある。古代でも数百から数千キロに及ぶ交流路は稀ではない。だが流通する物資や文化にはそれぞれの地域に特有の制約がある。エジプト・キプロス・ギリシアの海上交易路について海洋人類学の成果を踏まえ文化的往還の実際の可能性を考察するため、地中海の古代船の復元実験についての学術的蓄積を利用することが必須となる。この点も、次の研究活動に組み込んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 高橋 秀樹 | 4. 巻 77 |
| 2. 論文標題 アガメムノーとヘーレー女神の失敗 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 新潟史学 | 6. 最初と最後の頁 23-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 高橋秀樹 | 4. 巻 15 |
| 2. 論文標題 大言壮語を非難されるイードメネウスの奮起 『イーリアス』第XIII書に見る強制（強請）行為 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 資料学研究 | 6. 最初と最後の頁 21-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 高橋秀樹 | 4. 巻 75 |
| 2. 論文標題 三つの没落史観～『労働と日』、古代エジプト第一中間期文芸、『平家物語』～ | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 新潟史学 | 6. 最初と最後の頁 61-76 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 高橋秀樹 | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 ゼウス神の卓越性～『イーリアス』第XV書に見る強制（強請）行為～ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 資料学研究 | 6. 最初と最後の頁 1-28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hideki Takahashi |
| 2. 発表標題 Degeneration of humanity : Three historical narratives |
| 3. 学会等名 3e Colloque international du programme Atlantys (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 大城 道則、山田 重郎、高橋 秀樹、平野 みか、青木 真兵、比佐 篤、山下 真理亜、部 勇造、石原 忠佳、小澤 実、森 雅秀、角道 亮介、青山 和夫 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 河出書房新社 | 5. 総ページ数 128 |
| 3. 書名 古代文字入門 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 弘末雅士、高橋秀樹、清水和裕、上田信、渡邊佳成、荷見守義、荒野泰典、和田郁子、疇谷憲洋、唐澤達之、鈴木英明、守川知子、佐々木洋子、中里成章、石川禎浩、土田映子、栗田和明 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 春風社 | 5. 総ページ数 350 |
| 3. 書名 海と陸の織りなす世界史 港市と内陸社会 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|